

「改めて、男女共同参画を考える」

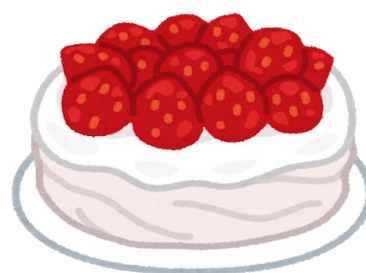
ウィルあいち交流ネット参加グループ

交流ネット通信が、100号の節目ということ。長い歴史と長くかかわられている先輩方に、敬意と感謝を表したい。

現在、国が第5次男女共同参画基本計画の策定を進めている。私も、ある市の男女共同参画行動計画の策定に携わっており、男女共同参画について、改めて勉強したり、いろいろな人の考えに触れたり、深く考える機会を持っている。

県の人材育成セミナーで勉強し、交流ネットやそだね2017、地域開発みちの会などに関わり、活動していると「男女共同参画」は共通認識のワードになっている。しかし、人材育成セミナーの際も、男女共同参画関連の講座の際も、終了後に「たくさんの人にこのことを勉強してほしい」という感想がある。男性に限らず、多くの女性も、「男女共同参画」という言葉自体は知っていても、実際の内容やなぜ必要なのか、男女共同参画社会のメリットなどは、理解していない。また、行動計画を策定するため、事前に行った、住民意識調査によれば、「家事や育児は、夫婦で分担する」ことが良いと思っている人は多い。しかし、実際にしっかり分担できている人は多くはなく、しっかり分担できている人は、分担できていることを周囲に伝えると、「旦那さんにそこまでさせていいのか」と周囲の反応は冷たいという。

もう1点、先述の住民意識調査で特徴的だったのは、「男性」とか、「女性」とかではなく、「個人」として考えた方が良いということ。実際に行動計画を策定していると、「男性」「女性」という区分けは、策定を難しくさせる。特に、幅広い世代、福祉のことなどを盛り込んでいこうと思うとなおさらである。私が作成に関わっている男女共同参画行動計画は、「多くの人に男女共同参画について、正しく理解してもらうこと」「きちんと行動に移していけること」を観点に、「個人」という軸で、策定していこうと思う。



そだね2017 早川純子

- *さわらび会
- *メンズリブ名古屋
- *女性学'98の会
- *グループ・キートス
- *ウィル2000
- *ウィルD o 2002
- *サーティネット'05
- *ベリーズ18
- *Step07
- *Fem.'09
- *Amelie'10
- *AIC25
- *ウィルウィル14
- *ひかるよ15
- *カクラカクラ'16
- *そだね2017
- *Hey Say Final

(設立順)

ウィルあいち交流ネットとは…

ウィルあいちセミナー等の受講修了生による自主活動グループで組織された団体です。



男女共同参画に向けて「変わるべきもの」はなにか

世界各国で「ジェンダーの主流化」が提唱されて30年ほど経ちます。しかし日本では、いまだに「男性稼ぎ手」家庭が多く、家事・育児・介護の大半を女性が担っています。令和2年版「男女共同参画白書」でも、非常に根強い性別分業の実態が描かれています。女性の労働力参加が増えたといいますが、未婚化による女性の継続雇用の影響を除くと大筋では変化していません。「共働き世帯が増えた」とはいいますが、その多くは妻がパートタイマーの世帯です。2018年「労働力調査」によれば、「夫婦と子どもからなる、妻年齢25-34歳の世帯」に限ったとき、夫婦ともに週労働35時間以上であるフルタイム共働き世帯は17.9%で、専業主婦世帯はその倍以上、38.3%です。こういった数字だけ見れば、「この30年、未婚化が進んだ以外に何が変わったのか？」とってしまうほどです。

原因の一つは、変えるべきターゲットを外してきてしまったことにあります。変わるべきは女性ではなく、男性あるいは社会（特に有償労働の仕組み）です。男性は慢性的長時間労働で疲弊し、家庭参画が大幅に遅れています。介護分野では参画が目立ちますが、これは少子化で親のケアの際に自分以外にあてにできるきょうだいが減ってしまったことと、「自分の親の面倒は（配偶者ではなく）自分で見る」という成人親子関係の「個別化」の影響です。

新型コロナの影響で特に男性の在宅勤務が増え、これからも少しずつ男性の在宅時間は増えていく可能性があります。ケアワークやサービス職に就くことが多い女性よりも、男性の方がリモートワークに向いている仕事をしていることが多いからです。ピンチをチャンスに変え、家で「仕事」（有償労働も無償労働も）ができる男性が増えていくことを願っています。

内閣府 共同参画9月号より
(立命館大学産業社会学部教授 筒井淳也氏)

編集後記：コロナが終息に向かうどころか盛り返しています。早くワクチンが開発されるといいですね。あせらず気長に待ちましょう。

S. I

編集発行：ウィルあいち交流ネット

編集協力：(公財) あいち男女共同参画財団